

矛盾する行動記述の統合過程と 属性判断に関する実験的研究 ——文章理解からみた印象形成の実験——*

松本 芳之**・湯田 彰夫***

The integration of discrepant behavioral statements and the judgements of dispositions.

Yoshiyuki MATSUMOTO (Nishi-Tokyo University)

Akio YUDA (Shinshu University)

Abstract

This study examined the integration of inconsistent behavioral descriptions. Three hundred and forty-one college students were asked to read the discrepant behavioral statements and to answer the questionnaires. In the integration condition, subjects were also asked to write freely the accounts which were supposed to exist between the discrepant statements. It was shown that when the sequence of the statements was extrovert-introvert, the subjects who succeeded in the integration explained that some negative events had happened to the stimulus person and changed his behavior. But when the sequence was introvert-extrovert, more than half the subjects who succeeded in the integration explained the discrepancy in more complicated ways, that is, negative events caused introvert behavior and then positive events caused extrovert behavior. When the sequence was extrovert-introvert, the discrepancy was high, and subjects succeeded in the integration, the disposition of the stimulus person was judged to be extrovert. These results were explained in terms of schema and social norms for sociable behaviors.

Key words: social cognition, impression formation, attribution, schema, text understanding.

問 題

われわれは、他者の性格属性を直接確認できる行動から推論する。このとき、行動の一貫性が重要となる (Kelley, 1967)。しかし、印象形成の実験が示すように、一貫性が存在しなくても属性判断は可能である。その場合、初期情報が全体の評価を左右する (Asch, 1946; Luchins, 1957)。ただし、こうした矛盾する情報を用いる実験については、その外的妥当性

* 本研究の一部は日本グループ・ダイナミックス学会第35回大会で発表した。また、研究の実施、および論文の作成に当たり、早稲田大学教育学部橋本仁司教授に貴重な示唆を得た。記して謝意を表す。

** 西東京科学大学 409-01 山梨県北都留郡上野原町八ッ沢字乙越2525

*** 信州大学教養部 390 長野県松本市旭3-1-1

が問われることがある。情報を与えられた被験者はしばしば困惑し、呈示されたような了解困難な人物は実在しないと感じるからである。しかし Mischel (1968) らの批判を待つまでもなく、人は常に性格属性と一致した行動を取るわけではない。例えば、日頃明るいと言われている人でも、何か不愉快なことがあったり、失敗をした後では、人と会うことを避けたり、生彩のない振舞いをするであろう。属性は平均的行動を指示するものであり (Alston, 1975; Fletcher, 1984)、個人が示す行動の範囲は、本来それほど狭いものではないのである。確かに、観察者は行為者に比べ状況の要請や圧力を過小に評価し、行動と属性が一致すると見なしやすい (Jones and Nisbet, 1972; Nisbett & Ross, 1980)。しかし、われわれは人の行動が状況によって変化することもまた、十分に理解している (Ajzen, 1971)。実際、日常場面では、他者が多様な行動を示すからといって、ただちに当惑するようなことはない。これらの点を考慮するならば、実験の中で呈示される行動が、現実には存在し得ないほど大きな矛盾を含むとは考え難いのである。

他者情報が言葉や文章によって呈示される実験の場合、被験者にとっては、矛盾する記述の意味を把握し、どう統合するかが要点となる。すなわち、この種の実験は実際には、文章理解の過程を扱っているとみることができるのである。Rumelhart (1984) によれば、文章の理解は一種の仮説検証の過程である。読み手は、首尾一貫した関係を見いだそうと努める。その際、主題や状況、描かれた人物などについて、暫定的な仮説を次々に設定しながら、それを修正したり、破棄する作業を行っているのである。この解釈の基盤となる一般知識が、日常生活の中で身につけた図式 (Schema) である。読み手は図式を用いて、文中の情報を交互に関連づけ、直接言及されていない部分を補う。個々の文を因果的に結びつけることで全体の意味の統一を確保するのである (Black & Read: 1984)。描かれた人物の行動が一貫していない場合、読み手は異なった行動が生じた意味を理解せねばならない。それには、何らかの事情によって行動が変化したものとして捉える必要がある。つまり、変化をもたらした理由を知らねばならないのである。文章記述の場合、読み手が状況記述や文脈から手がかりを引き出すことができれば、理由を明記する必要はない。ところが、実験の中で被験者に与えられる情報は、普通、行動記述のみであり、理由に関する記述や文脈の手がかりは一切提供されない。このとき、矛盾する内容を統合するには、読み手自身で行動の変化を説明できる理由を充たせねばならない。無論、読み手がつねに適切な仮説を想定できるとは限らない。その場合に、対象人物は理解し難いものとなるのである。これらの点で、従来の実験は被験者に対して、暗黙のうちに矛盾の調整を求めていると考えられる。人は矛盾する情報断片に接した場合、整合性を与える説明を積極的に探索する。実際、印象形成の実験の中でこうした試みが存在することは、当初から指摘されてきたところである (Luchins, 1957)。実験結果の解釈をめぐるその後の議論も、記述内容の意味をどう理解するかという問題が中心であった。しかし、属性判断の結果だけを議論の対象とすることは、重要な情報を見落とすことになりかねない。意味を理解する過程が重要であるならば、矛盾する記述の統合化を直接吟味すべきであろう。

ところで、矛盾する行動記述を説明する上でどのような事象が適当であるかという判断は、行動を理解するための一般的な知識に依存する。その一つが、日常の行動を支える社会規範である。われわれの対人行動には社交性の規範が作用している (Reeder, 1985)。例えば、

知人に会ったときには、挨拶をしたり言葉を交わすことが必要である。その一方で、他者がそうした行動を示したとしても、規範に従って活動しているという意味で、特に注目を要するとは考えない。ところで、印象形成の研究は、当初から、向性に関する他者情報を操作したものが多い。社交性の規範に照らしてみると、それらの外向的行動記述には、社会的に穏当な行動が多く含まれていると言える。逆に、内向記述の中にしばしばみられる、知人の姿を認めて無視するといった行動は、通常の規範から逸脱している。行為者が誰に対しても、つねにこうした行動を取るのであれば、内向的属性が推論されるであろう。しかし、同一人物が両方の行動を取ることが明白な場合、内向的行動は何らかの状況的理由によって生じたと考える方が適当となる。例えば、その相手との関係が損なわれているとか、規範から外れざるを得ない事情があったなどである。このように、内向的行動はそれ自体状況の影響を含意するとすれば、内向的記述が先行する文章（以下、内向外向型と略記）を理解する方が、認知的処理は複雑になると考えられる。外向的行動記述が先行する（以下、外向内向型と略記）場合、統合に必要な状況は、二つの記述の間で対象人物にとって望ましくない事象が起ることである。具体的には、「外向的行動→（事象）→内向的行動」という事象系列を想定すればよい。これが行動の変化を状況的理由によって説明するための通常の図式である。カッコの部分は、実験の際、刺激文章を理解するために読み手自身が補う部分である。内向外向型の場合も、行動を変化させるに足る望ましい事象を想定することが必要である。しかしそれと同時に、最初の内向的行動に対しても状況的な説明が与えられる可能性がある。すなわち、「（外向的行動→事象X→）内向的行動→（事象Xの変化、あるいは、関連事象Yの生起）→外向的行動」という事象系列によって、統合するのである。この図式は、記述の中に直接示されている行動変化を、先行する行動が生じた理由にまでさかのぼって説明するという遡久性を持つ。ただし、この図式はあくまで解釈を支える暗黙の時系列構造であり、前提となる冒頭の外交的行動については直接言及する必要はない。また、内向外向型には遡久的説明が不可欠であると言うわけではない。外向的行動への変化自体は、望ましい事象を想定すれば説明できるからである。しかし、外向内向型の記述に対して、「（内向的行動→事象X→）外向的行動→（事象Xの変化、あるいは、関連事象Yの生起）→内向的行動」という遡久的説明図式は用いられないであろう。読み手がこの図式を発動するには、対象人物にとっては外交的行動の方が説明を要するとみなさねばならない。例えば、内向的属性を持つことが予め分かっている場合である。しかし、呈示される記述の中にこの種の仮定を採用すべき根拠は存在しないからである。

こうした矛盾情報の統合化はまた、最終的な属性判断にも影響を与えるであろう。属性判断は、読み手が記述内容をどのように理解したか、その含意内容と関係する。統合化の過程で内向的行動に状況の説明が与えられるとすれば、属性を判断する上での重みは低下する。従って、適当な仮説を用いて矛盾調整に成功すると、属性判断はより外向的になるであろう。一方、情報の提示順序との関係はつぎのように考えられる。一般に文章の初頭部分を変更すると、その後の文章理解は大きな影響を受ける（Black & Read: 1984）。これは初期情報が認知的な制約条件として働き、後の情報の解釈に影響を与えることによる。従来の初頭効果はこの一例である。初期情報の重要性は文章理解の過程に広く当てはまる特徴であること、および、内向外向型で遡久的説明以外の形態も成立することなどを考慮すれば、従来と同じ

く、初頭効果が得られるであろう。ところで、初頭効果をめぐる従来の議論の中心は、後半の意味の解釈が、前半の情報内容に適合するように変化するかどうかであった。もし矛盾情報の統合が前半の内容に後半の意味を同化させることであるとすれば、呈示順序を問わず、調整に成功した方が初頭効果は強まることになる。すなわち、内向外向型ではより内向的に、外向内向型ではより外向的に評価されると言える。しかし、矛盾の調整は、単に前半の記述に合わせて全体を解釈することではなく、行動変化に適用される図式と社会的規範に従うと考えられる。そこで、呈示順序にかかわらず、矛盾調整に成功すると、外向的評価が強まると予想されるのである。また、本研究では呈示順序の要因に加え、行動変化の大きさ、すなわち内容の対比性を取り上げる。対比性が違っても、矛盾調整に用いられる図式は同じである。しかし、対比性が大きいほど、行動の異質性を無視できず、整合的な説明を与える必要は高まる。従って、矛盾調整に成功する例が増えるであろう。その説明の際、内向的行動が状況的変動と見なされるならば、属性評定は、対比性が強いほど外向的になると考えられる。

以上を実験仮説にまとめると次のようになる。まず、矛盾調整の達成率は、情報の呈示順序と記述内容の対比性によって異なり、外向内向型、および、対比性が強い場合に、高くなる。調整の方法は情報の呈示順序によって異なり、内向外向型では遡久的説明記述が用いられるのに対し、外向内向型では用いられない。また、属性評定については、外向内向型、対比性が強い場合、および、矛盾調整に成功した場合に外向性評定が強まる。本研究の目的は、文章理解の観点からこれらの仮説を検討することにある。

方 法

実験条件と被験者

男女大学生341名。実験条件は、刺激文章の呈示順序、内容の対比性の大小、矛盾調整の機会を独立変数とする8条件である。矛盾調整を行う条件の人数はTable 2に示した。なお、調整なし条件では、外向内向条件の対比大が38名、対比小が40名、内向外向条件の対比大が44名、対比小が40名である。

刺激文章

刺激文章は内向性、外向性について相反する印象を与えるような2つの行動記述からなる。その呈示順序によって、外向内向型、内向外向型に分けられる。また、2つの記述内容の対比性を変えるため、それぞれの行動記述について2種類の文章を用意した。一つはLuchins (1958)と同じ内容を用いた。これは、従来の研究との比較を容易にするためである。もう一つは、2つの行動記述間の対比性を強めたものを新たに作成した。その具体的内容は、つぎの通りである。

対比小・内向性記述

放課後、正男はたった一人で教室を出ると、家路についた。家までは遠い。通りは陽の光で眩しく輝いていたが、彼は日影を選んで歩いた。やがて向こうから歩いて来る、きれいな女の子に気づいた。彼女は前の晩に会った子だったが、正男は会釈一つせず、通りを足早に横切ると、喫茶店に入った。店は学生でいっぱいだった。顔見知りも、何人かいたが、彼は隅の席をとった。正男は店員が注文を取りに来るまで静かに待ち、コーヒーを飲み終わると、店を出て家に向かった。

対比小・外向性記述

正男は文房具を買いに家を出た。彼は友達二人と明るい通りを、背中一杯に日をあびながら歩いた。店は客がたてこんでいた。正男は店員の手が空くまで、知人としゃべりあっていた。店を出ようとした時、ちょうど入ってきた同級生に気づき、立ち止まって、短い雑談をかわした。店を出ると学校へと向かった。途中、正男は昨日紹介された女の子を見かけたので、少し立話をした。まもなくまた学校の方へ歩いていった。

対比大・内向性記述

講義が終わると正男は一人で教室を出た。キャンパスの中を歩いていると、前方から数人の男女のクラスメートが、歓声をあげて話しながらやって来るのに気がついた。その中の一人が気づいて声をかけてきたが、正男はうなずいただけで、道を横にそれた。校外に出ると近くの公園に立ち寄り、木陰のベンチに腰をかけタバコに火をつけた。持っていた雑誌を広げたが、すぐに雑誌を閉じるとベンチに横になり、何本かタバコを吸い続けた。結局正男は学校には戻らず、正男は人通りのない裏道を通して、下宿へ帰った。

対比大・外向性記述

正男は待ち合わせ時間に少し遅れて、女の子と二人で現われた。彼らは待っていた二人のクラスメートにからかわれながら、友人の車に乗り込んだ。車が走り出すやいなや、正男は昨夜の飲み屋での失敗談についてにぎやかに説明し始めた。正男の口から次々と出てくる冗談は、彼らを大いに笑わせた。正男はラジオを消し、最近はやりだしたロックのテープを取り出した。カーステレオから軽快な音楽が響く。正男は音楽に合わせて指でリズムを取りながら、今度の休みにこのメンバーでドライブに行こうと提案し、そのコースについて話した。

対比性の違いを確認するために、内向性記述、外向性記述のそれぞれについて、2種類の記述のうち、いずれがより内向的（外向的）であるかを比較する予備調査を行った。なお、一人の行う比較判断は一方の向性記述のみとした。その結果、内向性記述の場合、対比大の記述の方が内向的であると評価した者は46名中25名であり、2種類の刺激文章間に差はみられなかった ($p=.33$)。しかし、外向性記述については、対比大の記述の方が外向的であると評価した者は40名中28名であり、明らかに違いがみられた ($p=.008$)。従って、対比大の方が2つの行動記述間の相違が大きく、また、その差は主として外向性記述によることが確認された。

質問項目

刺激人物の属性や行動傾向を尋ねる質問項目は、以下の2種類からなる。その概要はTable 9に記した。

1. 属性や行動傾向についての質問

属性や行動傾向について具体的に記述した質問10問を用意し、これらの点について刺激人物がどのように特徴づけられるかについて判断を求めた。回答は各質問について7段階の記述を用意し、その中から選択させた。いずれの質問も第4選択肢は「どちらでもない」である。

2. 形容詞対に対する評定

刺激人物の特徴や属性を表す15の形容詞対を用意した。各形容詞対について7段階の尺度を用いて判断を求めた。

手 続 き

1. 実験は質問紙形式で実施した。教示、刺激文章、属性評定尺度などは小冊子にまとめ、配布した。被験者はまず、実験実施上の注意を受け、次いで、呈示順序と対比条件に従って、用意された刺激文章を読むように求められた。読了後、ただちに記述内容から得た、対象人物に関する大まかな印象を自由記入させた。
2. 次の手続きは、矛盾調整群のみに実施した。被験者はここで、「呈示した文章はより大きな文章から部分抜粋したものである。その際、途中の段落を省略した上で、前後2つの段落を直接結びつけた。そこで、省略された段落にふさわしいと思う内容を自由に記述して欲しい。」と説明を受けた。この後、ただちに、説明を記させた。
3. 最後に、刺激人物の属性や行動傾向に関する質問項目に回答を求めた。なお、その際、すでに読み終えた刺激文章や自らの記述を再読しないように注意を与えた。

結 果

I. 説明記述の内容分析

はじめに、矛盾調整群の説明記述を内容分析した。まず、それぞれの記述内容を「事象 X-前半記述-事象 Y-後半記述」の時系列枠組みに即して要約し、事象 X, Y に相当する部分に分離した。この基本作業の後、以下の点について分析を行った。分析は2名の評定者が独立に行い、両者の評価が異なる場合は、協議によって分類を定めた。

1. 矛盾調整の成否

もっとも基本的な分析は、説明記述が前後の矛盾の調整に成功したかどうかである。調整成功の基準は、異なった行動が生じた理由について言及していることである。説明記述の具体的内容を示すために、条件ごとに成否を1例ずつ選び、その概略を Table 1 に示した。Table 1 の内向外向型の2つの失敗事例のように、単に後半の記述に含まれる人物や事項に言及しているだけのものは、成功に含めない。条件ごとに成否の度数を示したものが Table 2 である。全体としては、55.3%が調整に成功している。条件間の差を比較するために対数線型分析を行なったところ、1次交互作用を含むモデルが有意となった。すなわち、内向外向型に比べ外向内向型で ($z=3.81$, $p<.001$), また、対比小よりも対比大で ($z=3.02$, $p<.005$) 成功事例が多かった。これらは何れも仮説と一致する。

2. 成功事例の内部分析

2.1 変化への言及の有無

調整成功に分類された説明記述には、異なった行動が生じた理由だけでなく、対象人物の気分、感情、行動などが実際に変化したことを明記しているものと、そうでないものとがある。例えば、Table 1 の外向内向・対比大の場合、出来事が対象人物に対して影響を与えたかどうかは述べられていない。しかし、外向内向・対比小の例では、対象人物の感情が変化することが明記されている。矛盾調整を厳密に考えるならば、調整の成否を変化への言及を含むかどうかで判定すべきかもしれない。しかし、この基準では、上記のような例が除外されてしまう。そこで、変化への言及の有無は、調整成功群の下位分類と位置づけ、分析を行った。条件ごとに度数をまとめたものが Table 3 である。この表について対数線型分析を行

Table 1 調整の成否による各条件の説明記述の例

A. 調整成功

外向内向・対比大：車の運転をしていた友人は、道に迷ってしまった。そこで正男が運転を替わった。皆大はしゃぎであった。そのせいか、正男はついスピードを出しすぎ、車をぶつけてしまった。けがはなかったが、友人の大切な車を傷つけてしまった。車の持ち主は黙ってふくれていたが、他のメンバーになだめられ、後日弁償する約束で分かれた。

外向内向・対比小：学校で、正男は些細なことから友達と口論してしまった。その時、クラスのみんが友達の方に同調したので、正男はショックを受けた。そして、人と話をするのが嫌になってしまった。

内向外向・対比大：正男の親友は、正男が沈んでいる様子なのを数人のクラスメートから聞いた。そこで、元気づけようと、電話で、一緒にデートでもしようと誘った。

内向外向・対比小：前の晩、正男は友達と喧嘩をしてしまった。文房具屋に入ると、偶然彼に出くわした。正男は、とっさに頭を下げて謝った。相手もほぼ同時に頭を下げた。互いに、それに気づくと、大声で笑った。

B. 調整失敗

外向内向・対比大：皆はそのコースに賛成し、正男にすべてを任せることになった。正男は、皆にいろいろと尋ねた後、“ぼくに任せておけ”と宣言し、また会うことにした。

外向内向・対比小：その晩、正男はある女の子と出会った。翌日、正男は学校へ向かった。学校では同級生たちといろいろと話した。

内向外向・対比大：下宿に戻った正男は、眠り込んでしまった。しばらくして、目覚めると、待ち合わせをしていたことを思いだし、急いで家を出た。

内向外向・対比小：家に向かっている途中、正男は女の子を連れた友人に会った。友人はその子を紹介してくれた。次の朝、学校に行く準備をしていると、文房具が足りないのに気づいた。

Table 2 矛盾調整の成否

矛盾調整	内向外向型		外向内向型	
	対比小 (n=40)	対比大 (n=51)	対比小 (n=37)	対比大 (n=51)
成功	13	24	19	43
失敗	27	27	18	8

Table 3 成功事例における変化への言及の有無

変化への言及	内向外向型		外向内向型	
	対比小	対比大	対比小	対比大
あり	6	9	15	25
なし	7	15	4	18

うと、外向内向型で、変化への言及が多いことが示された ($z=2.15, p<.05$)。このことは、外向的行動から内向的行動へと変化する方が了解しやすいことを示唆するものである。

2.2 遡及的説明の有無

説明記述が遡及性を持つか否かによって2つに分類した。すでに述べたように、遡及的説明とは、行動の変化を先行する行動が生じた理由にさかのぼって説明するものを指す。従っ

て、単に前半の記述に現れた刺激人物について言及しているだけでは遡及的説明としない。行動変化の説明方法の分類であるため、これも調整成功群のみを対象とした。なお、調整失敗群についても、何らかのかたちで先行の行動記述の原因に係わるような内容が存在しているかどうかを独立に確認したが、そうした例はまったく存在しなかった。調整成功群の中で遡及性を含む説明がどれだけ存在するかを示したものが Table 4 である。これを対数線型分析すると、全体としては遡及性なしの比率が高いことが示された ($z=3.84, p<.001$)。しかし、遡及的説明の有無は呈示順序によって異なり ($z=4.56, p<.001$)、90%以上が内向外向型に含まれるのである。ところで、外向内向型の2例はともに、刺激文章の中に述べられている、前の晩紹介された女の子に関するものであった。具体的には、「正男は好意を持ったが、既に恋人がいると分かった……」といった内容である。ただし、2例とも、好意を持ったことが外向的行動の原因であるとは述べていない。例えば、「夕べのことで、何時になく楽しい気分であった」などの説明は存在しないのである。この種の説明記述は外向的变化を含意しないと考えると、外向内向型には遡及的説明がまったく存在しないことになる。いずれにしても、遡及的説明は内向外向型の矛盾調整の過程で要請されることは明らかである。これは仮説と一致する。遡及的説明の完全さは変化への言及の有無と関係する。Table 1 の内向外向型の成功事例はいずれも遡及的説明である。このうち、対比小の例は、明らかに内向的行動に先立つ原因事象が明記され、その解決が対象人物に変化をもたらしたことも記されており、完全な説明となっている。これに比べ、対比大の例は十分とはいえない。対象人物に実際に何らかの出来事が起こったのかどうか、また、電話によってその感情や行動が変化したかどうかは、具体的に言及されていないからである。しかし、周囲の人々にとって、対象人物の内向的行動はいつもと違う、説明を要する行動と映っていた。対象人物への働きかけがこの判断に基づいていることは、明白である。この意味で、遡及性を含む説明と判断できる。なお、内向外向型で遡及性を含まない説明記述は、予期せぬ望ましい事態の発生である。この種の説明は、外向内向型と同様の説明方法を用いている。例えば、「思いがけぬ電話で楽しい気分になった」といった内容がこれに当たる。なお、この場合、「沈んだ気持ちでいた」などの、事前の行動にかかわるような指摘は存在していない。

Table 4 成功事例における遡及的説明の有無

遡及的 説明	内向外向型		外向内向型	
	対比小	対比大	対比小	対比大
あり	6	15	2	0
なし	7	9	17	43

2.3 変化の理由

調整成功群は、行動変化の理由として具体的にはどのような事象をあげているのであろうか。その内容を、a. 対人事象（友人との争い、恋人との別れ、友人・恋人との和解、友人の励まし、など）、b. 気分の変化（空しさ、落ち着き、など）、c. 非対人事象（交通事故、学校での不始末、など）、d. その他（何か悪いこと、何か良いこと、相手によって行動が変わること、など）、の4つに分類した。非対人事象も、最終的には対人的な問題となるも

のであるが、直接の対人事象と区別をした。また、気分の変化は特定の理由を記さずに、単に感情の流れとして説明する類である。従って、対人事象などによって生じた感情変化に言及している例は、含めていない。なお、当初、性格・素因のカテゴリーを設定したが、これに当てはまる事例はまったく存在しなかった。各理由の出現頻度を条件ごとに比べたものが Table 5 である。なお、ここでは、刺激文章中の行動変化にかかわるもののみを対象とし、邇及的原因事象は含めていない。邇及的記述には、Table 1 の内向外向型の 2 つの成功事例のように、同じ事象を取り上げているものと、そうでないものの両方がある。いずれにしても、理由の中では対人事象が圧倒的に多く 72.7% を占めている。また、その際には、与えられた記述と関係のない、突発的な状況の変化が持ち出されることは少なく、文章中に述べられている人物との間で、何らかの出来事が生じたと説明される場合が多い。Table 5 について対数線型分析を行うと、対人事象のカテゴリーの突出のみが有意であった ($z=7.56$, $p<.001$)。交互作用効果は見いだせず、条件によって想定される理由が異なるという事情は存在しない。

Table 5 成功事例における行動変化の理由

理 由	内向外向型		外向内向型	
	対比小	対比大	対比小	対比大
対人関係	9	21	13	29
気分の変化	3	0	2	5
非対人事象	0	0	3	6
そ の 他	1	3	1	3

3. そ の 他

3.1 感情表現

説明記述が感情表現を含むかどうかによって 2 つに分類した。この場合、変化の方向と一致するかどうかは問わない。具体的には、「やりきれなさ、孤独感、憂鬱、爽やか、気持ちが軽くなる」など、さまざまな表現が使用された。条件のほかに、調整の成否を加えて、整理したものが Table 6 である。対比性による違いは小さいので、これを込みにし、呈示順序および調整の成否と感情表現の関係について対数線型分析を行うと、全体としては感情表現を含まない例が多かった ($z=3.73$, $p<.001$)。しかし、感情表現の有無は調整の成否によってまったく異なり ($z=6.30$, $p<.001$)、成功群では 66.7% が感情表現を用いているのに対し、失敗群では 6.3% にすぎない。感情表現を含むもののうち、93.0% は成功群に属する

Table 6 説明記述における感情表現の有無

矛盾調整	感情表現	内向外向型		外向内向型	
		対比小	対比大	対比小	対比大
成 功	あ り	11	15	16	24
	な し	2	9	3	19
失 敗	あ り	2	1	2	0
	な し	25	26	16	8

のである。呈示順序の効果も有意であるが ($z=2.31, p<.05$)、これはあくまで外向内向型で調整成功の比率が高いことの影響であると考えられる。

3.2 性格・素因

対象人物の性格素因への言及が存在するかどうかについて分類した結果を Table 7 に示した。表から明らかなように、性格素因について何らかのかたちで言及した例はわずかであり、全体で 7 例、3.9% にすぎない。その具体的内容は、内向外向型の場合「高い自尊心、陽気、明るい、内気、内向的・暗い・明るい (1 例で 3 つの属性に言及)」, また、外向内向型の場合「明るい、自己中心的」であった。なお、明るいと暗いは、あくまで性格属性として記されているものである。従って、「明るい気分」などの例は含めていない。それぞれの内容から明らかなように、性格素因の内容は特定の行動形態や呈示順序と一致しているわけではない。また、この 7 例はいずれも調整成功群に属していた。さらに、そのうちの 6 例は変化への言及を行い、かつ、感情的表現も使用していた。このように、性格素因への言及例は数が少ないものの、それが存在する場合、全体の矛盾調整の質は高いものとも言える。

Table 7 対象人物の素因への言及の有無

性格素因 への言及	内向外向型		外向内向型	
	対比小	対比大	対比小	対比大
あ り	2	3	0	2
な し	38	48	37	49

4. 説明記述の文字数

説明記述を量的側面から比較するために、使用文字数を求めた。条件および調整の成否ごとの平均値を示したものが Table 8 である。各群の分散が明らかに異なるため ($\chi^2=26.8, df=7, p<.001$)、文字数を常用対数変換した値について分散分析を行った結果、刺激文章については対比大で ($F=28.2, df=1/171, p<.001$)、呈示順序については内向外向型で ($F=5.33, df=1/171, p<.05$)、また、調整の成否については成功群で ($F=7.2, df=1/171, p<.01$)、それぞれ使用文字数が多いことが示された。交互作用はすべて有意ではない。使用文字数が内容構成の複雑さをある程度反映するとすれば、呈示順序による相違は、内向外向型の行動変化の理解には複雑な説明を必要とするという仮説に一致する。調整の成否による差も、矛盾調整の過程で説明記述が複雑化することを示唆している。呈示順序と調整の成否に交互作用がないことから、理解の困難さは調整の成否にかかわらずある程

Table 8 説明記述の文字数の平均値 (SD)

矛盾調整	内向外向型		外向内向型	
	対比小	対比大	対比小	対比大
成 功	137.4	181.3	115.8	144.3
	(65.9)	(82.0)	(48.1)	(59.9)
失 敗	101.5	150.1	90.4	140.9
	(37.8)	(74.1)	(34.1)	(42.2)

度影響していると考えられる。なお、対比性の違いによって大きな差が示されているが、これは対比大の外向型の刺激文章が具体的な状況設定を用いたために、説明記述に含めることができる人物や出来事が増加した結果であろう。

II. 属性評定

刺激人物の属性に関する質問項目は2種類ある。しかし、回答はいずれも7段階の評定尺度である。そこで、全部をまとめ25項目の因子分析を行い、3因子を抽出した（主因子法、バリマックス回転）。最終的な分散説明率は42.5%であった。質問項目と因子負荷量をまとめたものがTable 9である。なお、Table 9には形容詞対以外の項目については要約を記した。例えば、実際の項目1の内容は、「正男は辛抱強い方だと思いますか」となる。各因子は、第1因子が“外向性—内向性”，第2因子が“素直—わがまま”，第3因子が“おおらか

Table 9 属性に関する質問項目と因子負荷量

項 目 内 容	因 子 負 荷 量		
	I	II	III
1. 辛抱強い			
2. 他人に隠し事をする			
3. 他人の意見を素直に聞き入れる		.711	
4. 何事においても不満が多い		-.547	
5. 人と話をすることが好き	.713		
6. 友達を作るのに苦勞する	-.608		
7. 大勢の人と一緒に遊ぶのが好き	.635		
8. 冗談を言うのが好き	.717		
9. 一人でいるのが好き	-.488		
10. 自分の評判が気にかかる			-.496
11. おしゃべりな — 無口な	.791		
12. 非社交的な — 社交的な	-.594		
13. 軽率な — 慎重な			
14. 受動的な — 能動的な			
15. 大まかな — 綿密な			.560
16. 行動的な — 思索的な	.561		.425
17. 素直な — ひねくれた		.690	
18. 恥ずかしがり — 人なつこい	-.535		
19. 陽気な — 陰気な	.758		
20. 暢気な — 心配性の			.612
21. 消極的な — 積極的な	-.686		
22. 明るい — 暗い	.742		
23. 地味な — 派手な	-.610		
24. 冷たい — 暖かい		-.579	
25. うるさい — おとなしい	.665		
固 有 値	7.278	2.162	1.177
分散説明率 (%)	29.11	8.65	4.71

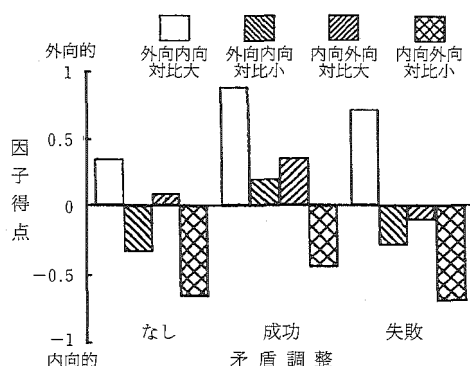


Fig. 1 第1因子因子得点平均値

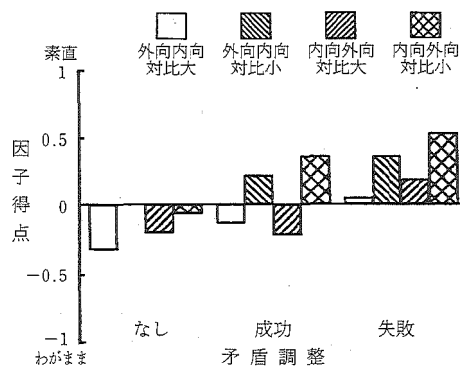


Fig. 2 第2因子因子得点平均値

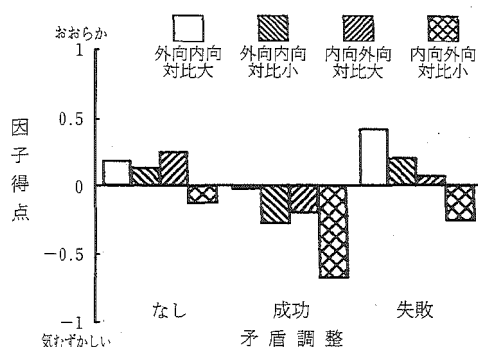


Fig. 3 第3因子因子得点平均値

さ一気むずかしさ”の因子と解釈することができる。ついで、各被験者の因子得点について分散分析を行った。なお、矛盾調整の要因については、調整ありの条件をその成否によって分け、全体で3水準の分析を行った。因子ごとに各条件の平均値を図示したものが、Fig. 1からFig. 3である。まず、外向性の因子では、呈示順序 ($F=21.64$, $df=1/329$, $p<.001$), 対比性 ($F=61.19$, $df=1/329$, $p<.001$), 矛盾調整 ($F=7.87$, $df=2/329$, $p<.001$) の主効果がいずれも有意であった。Fig. 1から明らかなように、要因の独立性は高く、交互作用はすべて有意でない。呈示順序については、外向内向型の方がより外向的であると見なされており、矛盾調整や内容の対比性にかかわらず、従来と同様の初頭効果が確認されたことを意味する。対比性については、対比大の方が外向的評価傾向が強くなっている。矛盾調整について多重比較（以下いずれもDuncan法による、有意水準は5%）を行うと、調整成功群が他の2群よりも外向的であると評価していた。調整失敗群と調整なし群の間には違いがない。これらは概ね仮説と一致する。つぎに、第2因子の素直さについては、対比性 ($F=10.23$, $df=1/329$, $p<.005$), 矛盾調整 ($F=6.97$, $df=2/329$, $p<.005$) について有意差が得られた。対比小の方が素直とみなしている。矛盾調整について多重比較をすると、調整失敗群が他の2群と異なり、より素直であると評価している。しかし、呈示順序はまったく効果がなく ($F=0.2$, $df=1/329$), 交互作用もすべて有意でなかった。第3因子では、呈示順序 ($F=5.35$, $df=1/329$, $p<.05$), 対比性 ($F=9.09$, $df=1/329$,

$p < .005$), 矛盾調整 ($F = 6.84$, $df = 1/329$, $p < .005$) の主効果が確認された。交互作用はすべて有意ではない。外向内向型, および, 対比大でよりおおらかと見なされている。また, 矛盾調整については, 調整成功群が他の 2 群よりも気むずかしいと判断している。

考 察

被験者は, 異質な行動記述を統合するためにさまざまな説明を案出した。しかし, 具体的内容は多様でも, その構造には明らかな規則性がある。そこではじめに, 調整成功群の説明記述の特徴を要約する。同一人物が異質な行動を示すという矛盾情報は, おおむね状況的理由によって説明される。多くの場合, 行動の変化は, 刺激文章の中に含まれる他者との間で何らかの対人的出来事が起こった結果であると解釈される。説明の中では, 状況の変化に対応する対象人物の感情について言及がなされることが多い。しかし, 行為者の性格や素因が引き合いに出されることは稀である。刺激文章の呈示順序は, 説明記述の複雑さに影響を与える。内向外向型の場合, しばしば内向的行動が生じた理由を説明した上で, 再度, 外向的行動へと変化したというかたちの説明が用いられる。これに対し, 外向内向型の説明構造は単純であり, 言及される変化は一つだけである。呈示順序による説明構造の違いを理解するには, 遡及的説明の概念が重要である。遡及的説明は, 論理的には, 両方の呈示順序に対して用いることができる。しかし, 実際はほとんど内向外向型についてしか用いられていない。これは, 2 つの行動様式に対する一般的期待の違いによる。すなわち, 矛盾する記述内容の統合は, 単に全体の解釈を前半の記述に適合させるのではなく, 図式的理解と社会的な行動規範によって決まるのである。この点は属性判断の結果からも明らかである。

属性評定に関する分散分析では, 3 因子とも顕著な主効果が得られた。しかし, 交互作用はいっさい認められなかった。試みに, 25 項目の粗点を個別に分散分析した結果をみても, 交互作用が有意であったのは, 項目 10 (自分の評判が気にかかる) における呈示順序と対比性の 1 次交互作用のみであった ($F = 7.93$, $df = 1/329$, $p < .01$)。このように, 呈示順序, 対比性, 矛盾調整の独立性は非常に高い。これは, 属性評定だけでなく内容分析の結果からもうかがえるところである。属性評定の第 1 因子には向性の因子が得られた。これは, 元来, 刺激文章がこの次元を利用したものであること, また, それと対応して質問項目も向性にかかわる内容が多く含まれることの結果である。第 1 因子について条件間を比較した結果は, おおむね仮説を支持している。呈示順序については, 初期情報の影響が顕著であり, 初頭効果が得られた。しかし, 初頭効果と調整の成否との関係を見ると, 調整に成功すると, 外向内向型では初頭効果が強まるのに対し, 内向外向型では弱まっている。これは, 行動変化に関する図式と一般的な行動に対する期待が, 属性判断にも影響していることを示すものである。ところで, 内容の対比性についても仮説と一致し, 対比性が大きい条件で外向的評価傾向は強まった。しかし, 予備調査の結果を考慮すると, この差の解釈には注意が必要である。すなわち, 予備調査では, 内向記述について 2 つの文章記述の間に十分な差が認められず, 対比性の相違は外向記述に依存しているからである。従って, 属性評定の差は, 対比性の影響よりも, 外向記述の程度の違いが反映された結果である可能性が残る。ここで, 向性を操作する文章の作成について指摘すべき点がある。向性は対人間の場面や具体的出来事の中で確認される。外向性記述の場合, 状況設定を工夫することで, その程度を操作することは比

較的容易である。本研究では、ドライブという場面を利用し、次々に冗談を言うなどの行動記述を含めることで、対比性の大きい文章を用意した。もちろん、内向性も、具体的場面の中で確認される。例えば、会議などで発言しないといった例を用いることもできるであろう。しかし、もっとも有力な手がかりは、対人接触を避る行動であろう。この内容は、すでに対比小の記述に含まれている。それゆえ、むしろ、内向的記述を弱めることで、対比性を操作する方法を工夫すべきかも知れない。われわれは、行動変化が基本的に状況の変動によって説明される以上、その場合でも、統合化によって外向的評価が強まるものとする。いずれにせよ、内向記述の程度に明確な差がある文章を用いた上でなければ、対比性に関して明確な結論は下せない。これは今後の検討課題である。他の2つの因子にも、異質な行動を統合することの影響が表れている。状況によって行動が大きく変わることは、周囲の人々には、勝手な振る舞いと映りやすい。対比性の主効果はこの傾向を示すものであろう。またこれは、調整失敗群の結果とも関係する。Table 1の外向内向・対比大の例のように、調整失敗群はしばしば行動の変化を無視するかたちをとる。つまり、一方の行動傾向にしか注目しないことで、より素直であるという判断が導かれたと考えられるのである。第3因子にも同様の傾向がみられる。行動の変化が大きく、それを統合できるほど、気むずかしいと評価しているのである。気むずかしさはまた、内向的記述とも関連が深いと考えれば、呈示順序による相違は、向性と同様の判断傾向を表していると言えよう。全体の属性判断の結果を要約すると、調整成功群は調整失敗群よりも、刺激人物をやや外向的であるとともに、わがままで気むずかしいと捉えている。すなわち、内向的行動を状況の影響によって説明することで、外向的評価を強め、また、異質な行動を統合する中で情緒的な安定性に欠けると判断したのである。従来の実験操作に相当する調整なし群は、両者の中間的特徴を示した。ただし、向性については失敗群に近く、情緒的な安定性の評価では成功群に近い。従って、調整なし群では単に矛盾調整に成功した者と失敗した者が混在しているというよりも、対象人物の了解困難さが強調されているように見える。このことは、つぎのような問題を提起する。

第一の問題は、意味の理解と属性判断の関係にかかわる。人は何よりもまず、体験した状況や他者の示す行動の意味を知ろうと努める。他者に対する属性判断はその結果を表す。属性評定の結果をこのように捉えることは、従来の立場と変わらない。当初から、属性の評定は、刺激の意味をどう理解しているかを反映するものとして位置づけられてきたからである。実際、統合化と属性判断が無関係ではないことは、本研究の結果からも明らかである。確かに、人は、相手の行動の意味を理解できない事態でも、その属性について尋ねられれば、一応の判断を下すことができるであろう。また、属性を判断することで、その後の過程が違ったものとなることも、認められるところである。しかし、それらは尋ねられたがゆえに生じた影響であるという可能性がつけに残る。それゆえ、他者の行動の意味をうまく理解できない場合の属性判断が、どのような意味を持つかについては、改めて考えるべきであると言えよう。その際、調整成功群の説明記述の内容が示すように、矛盾調整の試みは必ずしも、属性や素因の判断と直接関係しないことを考慮すべきであろう。実際、状況の影響によって説明できれば、属性と結び付ける必要はないのである。

第二は、記述文章を用いた研究が通常の対人認知過程の理解につながるかどうかという、外的妥当性にかかわる。社会心理学の実験では、実験が外的妥当性を持つかがしばしば

ば問題となる。印象形成を中心とする対人認知の実験も同様である。しかし、矛盾する属性や行動記述を呈示する実験の場合、問題は矛盾の大きさではない。記述を読んだ被験者が困惑するのは、異なった行動が生じた意味を理解できないからにすぎない。対人認知過程の研究としての外的妥当性の問題は、あくまで、文章課題を処理するやり方と現実場面で実際に人と接するときの対人認知過程がどう関係するかという点にある。例えば、印象形成に関する実験結果はしばしば、日常場面における第一印象の重要性を表していると意義付けられる。しかし、このような了解が妥当であると結論するには、文章を理解することと現実場面の対人過程がどの程度類似し、また、どの点で異なるのかを適正に概念化することが必要であろう。われわれは、課題内容からみて、多くの対人認知の研究が実際に扱っているものは文章理解の過程であると考えた。ただし、このように述べることは、従来の実験やそこで得られた知見が無意味であると主張するものではない。人が矛盾する行動記述をどう統合するのか、その方法は何に依拠するのか、さらに、統合化の過程が意味の理解や含蓄にどう影響するか、これらの問題に関する限り、実験の意味するところは明瞭である。実際、文の意味を理解する際に、日常生活の中で身につけた図式的知識と行動への一般的期待が関与することは、本研究の示すところである。しかし、そのことと現実場面での対人認知過程が文章理解の仕方を通じて解明できることは、必ずしも同義ではない。場面状況、相互の役割、社会的規範などの規定を受ける現実場面の対人認知と、非常に限定された構造と内容を持つ文章を理解することが実際にどの程度対応するかは、改めて検討すべき問題であろう。

要 約

本研究は、矛盾する行動記述の統合化を検討したものである。被験者341名は、矛盾する行動記述を読み、その後、質問紙に回答するように求められた。矛盾調整条件では、さらに、矛盾する記述の間に介在すると考えられる説明を、自由に記すように求められた。外向内向型の文章の場合、統合に成功した被験者は、刺激人物に望ましくない事象が起これ、それが行動を変えたと説明した。しかし、内向外向型の文章の場合、統合に成功した被験者は、望ましくない出来事が内向的行動を生じさせ、その後の望ましい事象が外向的行動をもたらしたという、より複雑な説明を用いた。外向内向型で、行動の差が大きく、かつ、統合に成功した場合に、刺激人物の属性はより外向的であると判断された。これらの結果は、社会行動にかかわるスキーマと規範から、説明された。

引用文献

- Ajzen, I. 1971 Attribution of dispositions to an actor : Effects of perceived decision freedom and behavior utilities. *Journal of Personality and Social Psychology*, 18, 144-156.
- Alston, W.P. 1975 Traits, consistency and conceptual alternatives for personality theory. *Journal for the theory of Social Behavior*, 5, 17-48.
- Asch, S.E. 1946 Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 41, 258-290.
- Black, J.B., Galambos, J.A. and Read, S.J. 1984 Comprehending stories and social situations. In R.S. Wyer, Jr. and T.K. Srull (Eds.) *Handbook of social cognition*, vol. 1 Hilledale, N.J. :

Lawlence Erlbaum Associates.

- Fletcher, G.J.O. 1984 Psychology and common sense. *American Psychologist*, **39**, 203-213.
- Jones, E.E. and Nisbett, R.E. 1972 The actor and observer : Divergent perceptions of the causes of behavior. In E.E. Jones, D.E. Kanouse, H.H. Kelley, R.E. Nisbett, S. Valins, and B. Weiner (Eds.) *Attribution : Perceiving the causes of behavior*. Morristown, N.J. : General Learning Press.
- Kelley, H.H. 1967 Attribution theory in social psychology. In D. Levine (Ed.) *Nebraska Symposium on Motivation*. vol. 15, Lincoln. : University of Nebraska Press.
- Luchins, A. 1957 Primacy-recency in impression formation. In C. Hovland, W. Mandell, E. Campbell, T. Brock, A. Luchins, A. Cohen, W. McGire, I. Janis, R. Feierabend, and N. Anderson (Eds.) *The order of presentation in persuasion*. New Haven, Conn. : Yale University press.
- Mischel, W. 1968 *Personality and assessment*. New York : Wiley.
- Nisbett, R. and Ross, L. 1980 *Human inference : Strategies and shortcomings of social judgment*. Englewood Cliffs, N.J. : Prentice-Hall, Inc.
- Reeder, G.D. 1985 Implicit relations between dispositions and behaviors : Effects on dispositional attribution. In J.H. Harvey and G. Weary (Eds.) *Attribution : Basic issues and applications*. New York : Academic Press.
- Rumelhart, D.E. 1984 Schemata and the cognitive system. In R.S. Wyer, Jr. and T.K. Srull (Eds.) *Handbook of social cognition*, vol. 1 Hilledale, N.J. : Lawlence Erlbaum Associates.